

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 5月30日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H01919

研究課題名(和文)「うつわ」と「うつし」：情報化時代の複製技術・藝術の美的範疇刷新にむけて

研究課題名(英文)"Utsuwa" and "Utsushi": Toward the Renewal of Aesthetic Categories for Art and Reproduction Techniques in the Information Age

研究代表者

稲賀 繁美 (INAGA, Shigemi)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：40203195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 20,400,000円

研究成果の概要(和文)：「うつわ」「うつし」という和語を鍵言葉として従来の欧米語の翻訳を前提とした文化伝播理論の再考察をすすめた。その結果、original とcopyとの対比を原則とし、originalityに価値を置く従来の価値観では、現在の電子媒体による複製文化には対応できないことを具体的な事例検討から立証した。この成果は、2017年度パリの日本文化会館、2018年度ロンドン藝術大学でそれぞれ実施した展覧会及び国際シンポジウムにおいて、現地の研究者や芸術家と共有発展を図り、また複数の国際学会での基調講演等によって紹介に努めた。その成果は日本語で刊行予定の論文集『映しと移ろい』によっても社会還元を図る予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「うつわ」と「うつし」という和語の国際的通用性を、国内外の会議と展覧会を通じてひろく社会に伝え、芸術創作から科学技術、情報伝達に関する情報理論の次世代にむけた刷新に有益な試見を提示することができた。陶磁器生産の知恵が脳科学の思考実験にも役立つことを具体的に成果として提出し、社会貢献をなした。

研究成果の概要(英文)：The research proposes the two Japanese terms, i.e. utsuwa and utsushi for the paradigmatic change of the heretofore dominant Western model of cultural transmission. In the latter the binary opposition between original and copy has been predominant, and the notion of originality has been appreciated at the detriment of the reproduction. However, the current mass copy culture with electric media has made it obvious that such value judgement can not any more keep up with the current situation. The research has proved this fact through international conferences and public exhibitions held in the Maison de la Culture du Japon a Paris in 2017, and at the London University of Arts in 2018. Similarly, several academic conferences have been conducted overseas for the sake of propagation and sharing of the idea and finding. The ultimate result will be published in Japanese in a book form under the English subtitle, Metempsychosis and Passage, forthcoming in 2019.

研究分野：美術史、技術史、比較文化、文化交渉論、海賊的流通機構研究

キーワード：情報 複製 美的範疇 器 うつし

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の文化状況にあつては、19世紀以来支配的になってきた、原典と複製との対比による文化伝達の情報理論モデルは、もはや耐用年限を過ぎている。だがこれに代わるモデルは欧米語の語彙組成のなかでは容易に提案できない。本研究では「うつわ」と「うつし」という和語を鍵言葉として、IT革命や電子情報化社会に対応できる次世代のモデル提唱を目指すこととした。これは従来の理系・文系の硬直した枠組みとその融合を目指すものではなく、むしろ分野ごとの縦割りや視野狭窄とが亢進している自然単科科学を相互融通するために、あらたな人文知の基礎を提供することを目論見とする。実際「器」と「映し」の有効性については、先立つ複数の国際学会で、日本語を超えた通用性を発揮し、国際的聴衆からも肯定的な反応を得ていた。

2. 研究の目的

本研究は、文化伝承と刷新のメカニズムに関する代替的なモデルを検討し、その実践的な提唱を目的とする。仮想現実やIT革命、地球表層を覆ったSNS網の四通八達にともない、情報伝達に関する従来の社会制度やマスコミ産業は急速に時代遅れ、機能不全の兆候を示し始めた。他方、ゲームや国際金融、税制などもふくめ、IT技術の発達は、現実と仮想現実との障壁を崩し始め、社会秩序への脅威ともなり始めている。あらたな技術的可能性を従来の社会秩序によって制御することが困難な以上、従来の社会的前提条件の問い直しが必要となる。刻印、媒体、媒介、共有といった基礎的な語彙を洗い直し、それを出発点として次世代の表象文化論・情報理論への新機軸形成にむけ、先鞭をつけることが、本研究の目的となる。

3. 研究の方法

この作業には、工学的な知識のみならず、社会科学的な統計調査、価値観の問い直しを含む人文的・多文化に渡る異文化理解の知見、さらには科学哲学を含む、認知論の基礎の見直しをも動員する、領域横断、学際的なアプローチが必要な方法となる。またとりあげる話題に関しても、シャノンの法則のように情報伝達における不易性に重点を置く理論から脱却し、

漏れのない水密性の容器というモデルから多孔性の選択透過のある枠組みへの移行を図り、狭義の因果関係の連鎖ではなく、多元的な相互相発相映の「縁起」モデルへの刷新を目指し、情報の循環によるスパイラルな更新と過去への回帰をも視野に収めるストア学派の知を汲み、これらの相乗から従来、雑音やゴーストとして排除された情報を有意化するモデルを目指す。

4. 研究成果

(1)国際シンポジウム開催による、情報の共有と国際的な伝播：研究代表者を中心に、パリの日本文化会館、ロンドン藝術大学ほかで、展覧会と国際的な研究者・芸術家を招いた会合をもよおし、「うつし」「うつわ」概念の国際的通用性を試すかたわら、それを出発点とした文理融合を含めた研究計画の提唱を具体的にすすめることができた。

(2)論文集公刊：これにあわせて、日本語で30名以上の多様な分野からの参加者の成果を持ち寄った論文集を編集刊行し、さらなる社会還元と将来への貢献の足掛かりとなす。

(3)国内外の研究者共同体・社会への発信：この間、研究代表者および研究分担者は複数の国際学会に基調講演者あるいは展示芸術家として招聘され、本研究の成果を実際に展示紹介し、討論を通じて知見を共有する成果を収めた。具体的には、台北ビエンナーレ、国際デザイン史学会、オックスフォード大学「穴窯」プロジェクト、フランス・スリジー国際会議、インド・デリーの文化財保護活用に関する国際会議、バングラデシュ・ダッカのアート・サミット、サン・ディエゴで開催された近代日中の芸術交流をめぐる国際シンポジウム、東京で開催された世界美術史学会の東京コロキウムほかの機会に、内外からの参加者と接触し、いくつかの会合では「うつわ」「うつし」を基軸とした将来のリサーチ・プログラムが提案される成果を収めている。フンボルト財団他との協力で達成された論集『イメージ学の現在』(東京大学出版会、2019)およびそれを継承する国際シンポジウムは、別の科学研究費補助金による企画であり、また日程の関係で以下の目録からは脱落するが、これを含めた文理融合の学術計画は、本研究の延長上に向かうべき方向を示したものと評価される。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計14件)

1. 稲賀 繁美、「Word and Image 学会にいたるアンヌ = マリー・クリスタンの若干の追憶 —あとがきにかえて」、『テキストとイメージ：アンヌ = マリー・クリスタンへのオマージュ』、査読有、巻号なし、2018年、257-263頁、<http://www.nichibun.ac.jp/~aurora/inaga/>
2. Shigemi INAGA, “Genèse et préhistoire des écosystèmes : « l'être vers la vie » géologique et « le milieu » proto-biologique”, *La mésologie, un autre paradigme pour l'anthropocène?*, 査読有、2018年、pp.265-273, <http://www.nichibun.ac.jp/~aurora/inaga/>
3. Yoshiaki Mihara, “Vico or Spinoza? An Other Way of Looking at Theory, circa 1983”, *Ex-position*, 査読有、40、2018, pp.7-36, 10.6153/EXP.201812_(40).0002
4. 三原 芳秋(講演)、金東植、尹大石(討議)、「『国民文学』再考 —「文学理論」の普遍性をめぐって」(共著)、『韓国学研究』、査読有、51、2018年、637-683頁、

http://www.inhakoreanology.kr/science/kor_study_view.php?sq=65

5. Shigemi INAGA, Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki's Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars”, *Japan Review*, 査読有、No.31, 2017, pp.105-122、<http://www.nichibun.ac.jp/~aurora/inaga/>
6. 三原 芳秋, “The Invention of “Japanese” Literature in Colonial Korea, or How Shame-less Literary Engagement Could be under Colonial Condition”, 『文艺理论研究』 (*Theoretical Studies in Literature and Art*)、査読有、39(3)、2017, pp.108-129, <http://hdl.handle.net/10086/29139>
7. Shigemi INAGA, “Crossing the Borders between the Living and the Dead: An Insight into Knowledge Transfer and Issues of Post-War Reconciliation”, 『世界の日本研究 2017 : 国際的視野からの日本研究』、査読有、巻号なし、2017年、348-358頁、<http://www.nichibun.ac.jp/~aurora/inaga/>
8. 範 麗雅、 「蔣彝の1930年代の英国での文筆活動—『中国の眼』の出版をめぐる—」, 『アジア地域文化研究』、査読有、第13号、2017年、94-117頁、<http://hdl.handle.net/2261/72802>
9. 三原 芳秋, ““Immature poets imitate; mature poets steal”—— テクストのノにおける 海賊行為 にかんする予備的考察」, 『海賊史観からみた世界史の再構築』、査読有、巻号なし、2017年、620-680頁、 <http://hdl.handle.net/10086/29090>
10. NEGAWA, Sachio, “Uma mistura de Brasil e Manchúria: Globalizacao da familia moderna japonesa vista por meio da história da Familia Sakiyama”, *Anais do IX Congresso Internacional de Estudos Japoneses do Brasil*, 査読有、巻号なし、2017, pp.303-310
11. 堀 まどか、 「韓国における日本現代詩の受容と共感—茨木のり子を中心に」, 『日本語文学(韓国日本語学会)』、査読有、74、2016年、271-286頁
12. 三原 芳秋, 「生命在焉 駒込武著『世界史のなかの台湾植民地支配』を文弱の徒が読んでみる、ならば」, 『クアドランテ[四分儀] 地域・文化・位置のための総合雑誌』、査読有、19、2016年、69-76頁、info:doi/10.15026/89135”
13. 範 麗雅、 「熊式一のロンドンにおける文学活動——中国古典戯曲の英訳・出版・上演を手掛かりに——」, 『アジア地域文化研究』、査読有、第12号、2016年、95-117頁、<http://hdl.handle.net/2261/60818>
14. Satoshi Udo, “Presence maghrebine au Japon: Contextes historiques de traduction et d'interpretation”, *Expressions maghrebine*, 査読有、15-1、2016, pp.187-197

[学会発表](計49件)

1. 堀 まどか、 「「地方」: 野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』」, 大阪市立大学文学研究科プロジェクト『日本文学を世界文学として読む』、2019年
2. 鵜戸 聡、 「新しい ことば を作る: 小さな文学の挑戦と可能性」, 『チベット文学と映画制作の現在』、2019年
3. Shigemi INAGA, “Les cerfs-volants dans l’art et la littérature”, *Cerfs-volants du Japon*, Paris, 2018
4. Shigemi INAGA, “A. K. Coomaraswamy and Japan: A Link between Colonial India and Annexed Korea”, 第231回 *Nichibunken Evening Seminar*, Kyoto, 2018
5. Shigemi INAGA, “Reconsidering the History of Modern Japanese Art as a Contact Zone: Chiasma and Osmose in the Meeting of Chinese Classics and European Painting in Modern Art Theories in Japan”, Ishibashi International Symposium, *Modern Japanese Art and China*, San Diego, 2018
6. 稲賀 繁美、 「いままぜ海賊史観か - グローバル時代の日本研究を考える: 商品流通と藝術概念を手がかりに」, 第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会、京都、2018年
7. 稲賀 繁美、 「A.K.クーマラスワーミと柳宗悦 - 植民地体制下での民藝復興の国際的共鳴現象 -」, 東北大学「稲賀繁美講演会」, 仙台、2018年
8. Shigemi INAGA, “Reevaluating Asian Arts and Crafts under the Colonial Rules in 1910s and 20s: A.K. Coomaraswamy and Yanagi Muneyoshi, between India and Korea”, *Rethinking Cultural Heritage : Indo-Japanese Dialogue in a Globalising World Order*, New Delhi, 2018
9. 稲賀 繁美、 “Pirates’ View of the World Art: proposal for an alternative to the current system of Knowledge Production”, ‘*Utsuwa Utsushi’ symposium*, London, 2018
10. 稲賀 繁美、 「A.K.Coomaraswamyと日本」, 日文研共同研究会、京都、2018年
11. 堀 まどか、 「外部からみた「日本」」, 日本比較文学会2018年度全国大会、2018年
12. Satoshi Udo, “Literary Representations of the Violence in Algerian Civil War, the International Conference of “Religion”, *Violence and Multiculturalism: An Interdisciplinary Inquiry*, 2018
13. Satoshi Udo, “Cadavers and Homeland: Kateb Yacine’s Poetics of Collectivity, 国際シンポジウム「アラブ地域の文学作品における個と社会」, 2018年
14. Shigemi INAGA, “A.K. Coomaraswamy and Japan A--Tentative Overview,” *The Sunwise Turn--Dhaka Art Summit*, 2018
15. 堀 まどか、 「日本から発信された 沈黙 のことば ; 詩人ヨネノグチを中心に」, 大阪市立大学公開講座「温故知新」, 2017年
16. 堀 まどか、 「境界者の文芸と民族独立運動」, 日文研共同研究会、2017年
17. 堀 まどか、 高良留美子、対談「すべてが沁みる大地からの言葉」, 宮崎進 すべてが沁

- みる大地、2017年
18. 堀 まどか、「野口米次郎と神智学ネットワーク」, 第4回ヨネノグチ学会、2017年
 19. 堀 まどか、「詩人・野口米次郎の Trans-creation」, 大阪府立大学公開講座「日本文学と翻訳」, 2017年
 20. 三原 芳秋、“The Invention of “Japanese” Literature in Colonial Korea, or how shame-less literary engagement could be under colonial conditions”, 思勉人文講座 338、2017年
 21. 堀 まどか、「境界者の文芸と民族独立の運動—サロジニ・ナイドウを中心に」, 国際研究集会「近代と秘境的ネットワーク：神智学、芸術、文学、政治」, 2017年
 22. 鞍田 崇、「いまなぜ民藝か」, 兵庫県民芸協会勉強会、2017年
 23. Shigemi INAGA, “Heritage Management as an Act of Compensation”, *International & Transdisciplinary Symposium on Advanced Future Studies Beyond Boundaries: Exploring the Creative Evolution of Transdisciplinary Studies*, Göttingen, 2017
 24. Shigemi INAGA, “Pirate’s View of World History: Toward Possible Re-orientations”, *International & Transdisciplinary Symposium on Advanced Future Studies Beyond Boundaries: Exploring the Creative Evolution of Transdisciplinary Studies*, Kyoto University, 2017
 25. 堀 まどか、「帰還者による戦後文学のなかの「鎮魂」——石原吉郎、甲斐弦、小林勝を考える」, 「鎮魂と戦争」共同研究会、2017年
 26. 三原 芳秋、「「国民文学」再考—「文学理論」の普遍性をめぐって—」, ソウル大学人文学院コロキウム、2017年
 27. 三原 芳秋、「文学理論の生態学的転回とは何か？」, ソウル大学比較文学研究室コロキウム、2017年
 28. Shigemi INAGA, “Genèse et préhistoire de l'écosystème: autour de l'imagination géologique et de la métaphore météorologique”, *La mésologie, un autre paradigme pour l'anthropocène?* (autour d'Augustin Berque), Cerisy la Salle, 2017
 29. Shigemi INAGA, “Japanese Critical Perception of the Idea of Europe,” *The Idea of Europe: The Clash of Projections*, Vienna, 2017
 30. 鞍田 崇、「アーバニズムに向かうケーススタディ：PAC」, 明建シンポジウム「建築・都市学の誕生—学際的協働が描く“Urbanism”の姿」, 2016年
 31. 鞍田 崇、「暮らしと祈りをめぐる旅、近江 暮らし 遺産」, MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM - 近江かたちを明日につなぐ - トークイベント、2016年
 32. 三原 芳秋, “Re-inventing Edward Said’s Humanism in East Asia, *Humanism and Humanistic Education*, 2016
 33. Shigemi INAGA, “Toward a Social Design in the Era of globalization,” *ICDHS (The International Conference on Design History and Design Studies)*, Taipei, 2016
 34. Shigemi INAGA, “Making Trans/national Contemporary Design History”, Panel Discussion, *ICDHS (The International Conference on Design History and Design Studies)*, 2016
 35. 稲賀 繁美、「海賊史観からみた世界史 500年：『文明の海洋史観』の裏側を覗く」, 第9回日文研・アイハウス連携フォーラム、2016年
 36. 鶴戸 聡、「小文学礼賛、あるいはなぜ外国小説を読むのかについての新たな問い」, 第24回全伯日本語・日本文学・日本文化学会 / 第11回ブラジル日本研究国際学会 (XXIV ENPULLCJ/XI CIEJB) , 2016年
 37. NEGAWA, Sachio, “Uma mistura de Brasil e Manchúria: Globalizacao da familia moderna japonesa vista por meio da história da Familia Sakiyama”, *IX Congresso Internacional de Estudos Japoneses do Brasil*, 2016
 38. FAN LIYA, “Chinese Painting through “Japanese Eye”: with Special Reference to Laurence Binyon’s Understanding and Misunderstanding of Chinese Painting”, *CIHA 2016 Beijing —The 34th World Congress of Art History*, 2016
 39. Takako KONDO, “Questioning Transparency: On Translation and Contemporary Japanese Art in World Art History”, *CIHA 2016 Beijing — The 34th World Congress of Art History*, 2016
 40. Shigemi INAGA, “Haptic Sensations Beyond the Visual Culture: Redefining “Modernity” in Museology so as to Readjust the Digitalized Global Scale Model”, 台北ビエンナーレ、2016年
 41. 鞍田 崇、「いまなぜ民藝か 素であること、その後、企画展「いわみもの～暮らしを形づくる石見のやきもの」特別講座」, 2016年
 42. Madoka HORI, “International Conflict or Asian Solidarity? : Tagore and Noguchi”, *International Conference on Tagore and Japan and Various Aspects of Japan and Her Culture*, 2016
 43. 鞍田 崇、「いまなぜ会津塗りか —素であること、その後、会津漆器共同組合青年部 講演会」, 2016年
 44. 稲賀 繁美、「海賊史観からみたコピー文化の再検討：日本のデザインは何をめざすのか」, 総合デザイナー協会、大阪、2016年
 45. 堀 まどか、「野口米次郎とタゴール、その詩学と使命」, 第113回全国大学国語国文学会60周年記念大会、2016年
 46. 稲賀 繁美、「道・無框性・滲み：「日本美学における あいだ」」, 日文研・稲賀班共同研究会 2016年度第2回研究会、2016年

47. 稲賀 繁美、「稲賀繁美『接触造形論』(名古屋大学出版会、2016)をめぐって」、第 227 回日文研木曜セミナー、2016 年
48. Shigemi INAGA, “Passage,Rahmenlosigkeit, Blotting Effect: Reflections on the « Japanese-ness » in Art (「道・無匠性・滲み：美術における「日本的なもの」をめぐる省察)”, 国際イメージ学シンポジウム・フンボルト・コレク：『思考手段と文化形象としてのイメージ：アビ・ヴァールブルクから技術的イメージ・画像行為まで』、東京大学、2016 年
49. 鞍田 崇、「いとおいしい食卓」、食の未来を考える週末』アーツ前橋企画展「フードスケープ 私たちは食べものでできている」関連シンポジウム、2016 年

〔図書〕(計 19 件)

1. 稲賀 繁美(編著)、花鳥社、『映しと移ろい：文化伝播の器と蝕変の実相』、2019 年、(印刷中)
2. 庄司 宏子(編著) 鶴戸 聡、溝口 昭子、結城 正美、吉田 裕、小林 英里、北原 妙子(著)、作品社、『国民国家と文学』(執筆担当：「アルジェリア人」とは誰か？：カテブ・ヤシンにおける「ネイション」の潜性) 2019 年、pp.21-60
3. カメル・ダーウド、鶴戸 聡(訳)、水声社、『もう一つの「異邦人」』、2019、201 頁
4. ゴウリ・ヴィシュワナタン(著)、三原 芳秋(編訳)他、みすず書房、『異議申し立てとしての宗教』、2018 年、464 頁
5. 鷲田 清一(編)、佐々木 幹郎(著)、山室 信一(著)、渡辺 裕(著)、コラム執筆：堀 まどか、他 7 名、講談社選書メチエ、『大正 = 歴史の踊り場とは何かー現代の起点をさぐる』(執筆担当：時代を読む視点 二重国籍) 2018 年、124-125 頁
6. 鶴戸 聡、吟遊社、『吟遊』(執筆担当：アラブ俳句と現代詩のあいだ：「世界俳句」第一四号を読んで) 2018 年、22-23 頁
7. 範 麗雅、名古屋大学出版会、『中国芸術というユートピア：ロンドン国際展からアメリカの林語堂へ』、2018 年、590 頁
8. Yuko KIKUCHI, Shigemi INAGA, Hiroshi ONISHI 他、CCW College and TrAIN, University of the Arts London, *Utsuwa – Utsushi* (Exhibition Catalogue)、2018、36p
9. 稲賀 繁美、NHK 出版、『日本美術史の近代とその外部』、2018 年、233 頁
10. 稲賀 繁美、国際日本文化研究センター、『A Pirate's View of World History – A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective』、2017、174p
11. Hori Madoka, Gita Keeni (eds.) Granthana Vibhaga, Visva-Bharati:India, *Centenary Year of Gurudev Rabindranath Tagore's Maiden Visit to Japan : Rabindranath Tagore and Japan*, 2017, pp.29-39
12. 堀 まどか、浦西 和彦(編)、檀原 みすず(編)、増田 周子(編)、和泉書店、『田辺聖子事典 ゆめいろ万華鏡』、2017 年、76、141、147-148、183-184、281-282、331 頁
13. 犬飼 隆、多田 伊織、井上 幸、岩下 武彦、尾山 慎、桑原 祐子、杉本 一樹、鈴木 景二、鈴木 喬、瀬間 正之、武井 紀子、中川 ゆかり、畑中 彩子、方 国花、三上 喜孝、毛利 正守、山口 英男、山本 崇、吉田 一彦、竹林舎、『古代の文字文化』(多田執筆担当：典籍木簡から見る、奈良時代の『千字文』『文選』の受容) 2017 年、482-504 頁
14. Yan Kallen, 鞍田 崇、松山幸子、MOSESSE Hong Kong, *Between The Light and Darkness*, 2017, pp.80-81
15. 稲賀 繁美(編・著)、多田 伊織、近藤 貴子、三原 芳秋、鶴戸 聡、大西 宏志、他 30 名、思文閣、『海賊史観からみた世界史の再構築：交易と情報流通の現在を問い直す』、2017 年、814 頁
16. 藤森 清、堀 まどか、高橋 修、佐藤 秀明、日高 佳紀、中村 三春、松澤 和博、関口 安義、山崎 一穎、中山 弘明、山田 有策、木股 知史、瀬崎 圭二、五味 淵典嗣、吉田 司雄、大東 和重、中根 隆行、田口 律男、岩淵 宏子、飯田 祐子、光石 亜由美、清水 康次、宗像 和重、大塚 常樹、勝又 浩、宮川 健郎、ひつじ書房、『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』、2016 年、254 頁
17. 白杵 陽・鈴木 啓之・鶴戸 聡、他 52 名、明石書店、『パレスチナを知るための 60 章』(執筆担当：パレスチナ演劇) 2016 年、183-187 頁
18. 住友彦彦、鞍田 崇、森岡 祥倫、原田 信男、石倉 敏明、稲葉 俊郎、アノニマ・スタジオ、『フードスケープ 私たちは食べものでできている』(執筆担当：食と自然と僕らの時代) 2016 年、12-15 頁
19. 鞍田 崇、明治大学環境人文学研究室、『物言わぬ、物 —たとえば、「若松鶴模様 吸物椀 四拾人前」』記録集、2016 年、12 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.nichibun.ac.jp/~aurora/inaga/>

<http://events.arts.ac.uk/event/2018/5/4/-Utsuwa-Utsushi-symposium/>

<https://www.facebook.com/utsuwautsushi/>

6. 研究組織

(1)研究分担者 (凡例にしたがって、given name は小文字で記してある)

研究分担者氏名：三原 芳秋

ローマ字氏名：MIHARA, yoshiaki

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院言語社会研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10323560

研究分担者氏名：堀 まどか

ローマ字氏名：HORI, madoka

所属研究機関名：大阪市立大学

部局名：大学院文学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20586341

研究分担者氏名：鵜戸 聡

ローマ字氏名：UDO, satoshi

所属研究機関名：鹿児島大学

部局名：法文教育学域法文学系

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70713981

研究分担者氏名：鞍田 崇

ローマ字氏名：KURATA, takashi

所属研究機関名：明治大学

部局名：理工学部

職名：専任准教授

研究者番号(8桁)：80469618

研究分担者氏名：大西 宏志

ローマ字氏名：ONISHI, hirosi

所属研究機関名：京都造形芸術大学

部局名：情報デザイン学科

職名：教授

研究者番号(8桁)：90351361

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。